

愛知県南知多町の離島・日間賀島の島おこしに学ぶ

愛大地域おこし協力隊長 米山直希

日間賀島再訪

平成26年2月1日、私たち愛大地域おこし協力隊は第二回日間賀島訪問調査を実施した。

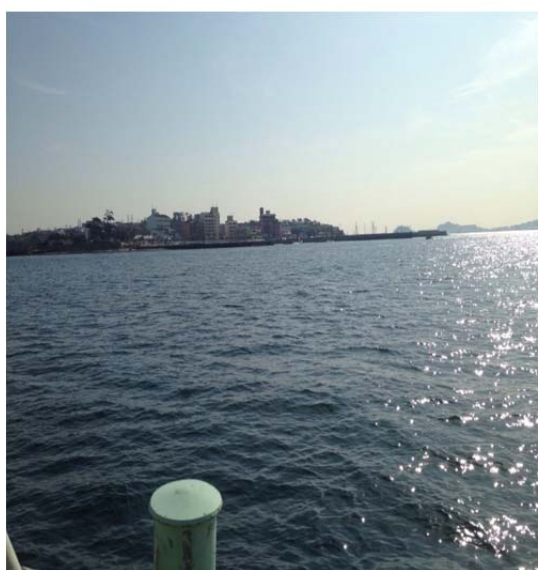
日間賀島へは前回と同様、名鉄河和線終着駅の河和駅から日間賀島漁師の清水光人さんの車で師崎港まで行き、そこから海上タクシーに乗るルートをとった。清水さんはとてもおおらかな人柄で、私たちの訪問を歓迎してくださった。

清水さんの車から降りるとやはり冬の寒さが堪えるが、幸い訪問日は爽やかな冬晴れで空一面が澄み渡り、加えてこれから始める調査のことを考えると興奮のせい少し心が温まる。

海上タクシーに乗り、船が飛沫を上げ始めると風が全身を包み込み、都会では味わえない解放的な気分になった。そして日間賀島が大きく見え始めると、私たちは上陸の準備に取り掛かった。

上陸すると私たちは最初に昼食をとることになり、今回も清水さんの案内で前回と同じ定食屋に入った。店内は9月と変わりはないが、客層が9月は学生などの若者が多かったのに対し、今回はご年配の夫婦が目立った。やはり季節によって客層が変化することは事実なのだ。

席に着くと、私は刺身定食を注文し、メンバーも各々好きなメニューを注文した。刺身定食が到着すると、その鮮度の良さに私は驚いた。食材に対して素人である私でも一目見ただけでよい食材であることがわかるのだ。というよりも食材のエビが皿の上でぴくぴくと動いていたので、ここで鮮度の良さを説明する必要はないだろう。ご飯がお代わり自由だったので私は次々と日間賀の海の幸と白米を口に運び、気が付くとご飯を4杯食べてしまった。鮮度が良い食材をリーズナブルな価格で満腹になったので私はとても満足した。



ヒアリング調査開始

食事の後は2グループに分かれて観光客に対してヒアリング調査を行った。ヒアリング内容はおおむね以下の通りである。

どこから来たか。

どうやって来たか。

何回目の日間賀島観光か。

なぜ日間賀島に来たのか、そのキッカケ。

来る前と来た後のイメージ。

日間賀島をどこで知ったか。

どういった観光予定か。

日間賀島を知り合いに教えたいか。

また来たいか。

ヒアリング時間が1時間程度と限られており、あまり多く質問をすることができなかったが10組の方にお話を伺うことができた。私のグループは西港からスタートしサンライズビーチに向かって歩き出した。

最初に出会ったのは20代前半カップル。軽く挨拶を交わし、お話を伺うことができた。日間賀島へは名古屋から車とフェリーを乗り継いで来たそう。今回は初めての日間賀島観光で、のんびりとした時間を二人で過ごしたいためやってきたという。日間賀島へはタコとのんびりとしたイメージを持っていて、来島してからもそのイメージは変わらないそう。確かにのんびりとした日間賀島の雰囲気はカップルにはもってこいである。日間賀島は昔から知っていて、これからご飯を食べに行くという。ぜひ知り合いに教えたい。そしてまた来たいと答えてくれた。

次にヒアリングに協力して下さったのは40代夫婦。豊田市から車とフェリーで来たという。こちらも初めての日間賀島で、暇だったから来たと答えてくれた。先の20代カップルもそうであったが、日間賀島には時間をゆったりと使いたい方に人気がありそう。

大府市から車と高速艇で初めての日間賀島観光に来た60代夫婦は、昔から気になっていた日間賀島に一度どんなところか見てみたいという軽い気持ちで来たと答えてくれた。日間賀島は愛知県内からの観光客が多く、そのほとんどがテレビや新聞、広告などを通して島のことを昔から知っている方が多い。そして日間賀島は県内の各都市から比較的近い位置にあるためわざわざ旅行という構えた気持ちで来るのではなく、ぷらっと立ち寄れる“遠足感覚”で足をのばす方が多いように見受けられた。

60代夫婦の方は働いていたころの忙しい時間を縫って行くほどのところではないと考えていて、今まであまり島を訪れる決心がつかなかったそう。しかし、定年を迎え時間にゆとりができたので来てみると、景色や食べ物がとても気に入ったのでまた来たいと答えてくれた。ただし、海水浴客で賑わいを見せる夏は避けたいらしく、のんびりと散策できる冬の日間賀島が良いという。しかし、海がきれいなのに、ゴミが散乱していることに

はがっかりしたようだ。確かに日間賀島はゴミが多い。後にゴミ問題にも触れるが、観光客はゴミによって景観を損ねている点を敏感に捉えていることもヒアリングによって判明した。

続いては30代家族連れ。こちらは大府市から車とフェリーで来たようだ。初めての日間賀観光で、やはり思い付きでふらっと来たという。来る前は観光商店などのお店がたくさんあり賑やかな所だと思っていたが、実際はとても静かでゆったりとし、自然がいっぱいで開放的な印象を持ったと答えてくれた。次は海水浴をしに夏に来たいと、60代夫婦とは反対の回答を示した。海水浴は比較的若い層に人気があり、若者やカップル、家族連れは冬よりも夏の日間賀島に興味を示すが、ご年配の層にはゆったりとした時間を過ごせる冬に興味を示すという面白い反応を今回のヒアリングで感じることができた。



来島の理由や島の印象

その他にもヒアリングの回答があるがここでは割愛させていただく。短時間のヒアリングではあったが、観光客の回答から得られた来島の理由や島の印象等をまとめてみると、以下の通りになる。

名古屋市や大府市、豊田市などの日間賀島から比較的近い都市からの観光客が多い。
(名古屋市3、豊田市2、大府市2、安城市1、知多市1、三重県1)

師崎までは車で来る方が多かった。(回答者全て師崎まで自家用車を利用)、日間賀島まではフェリーか高速艇。(フェリー7、高速艇3)

はじめての方が多かった。(10組全てが初めての日間賀島、しかしそのうちの1組のカップルの男性は2回目)

フグやタコなどの食を求めている。テレビで取り上げられているのを見て来た、クーポンが当たったため来たという意見もあった。

のんびりとしたイメージは来た後も変わらないという意見が圧倒的に多かった。

愛知県内出身の方は昔から日間賀島のことを知っている。テレビを見てはじめて知った方は少数。

日帰りよりも一泊のほうが若干多かった。(日帰り4、1泊6)

知り合いはほとんど日間賀島のことを知っているのですが、島の存在自体は教える必要はないが、行って良かったと伝えたいという回答が多い。

10組すべてが、ぜひまた来たいと回答。

ヒアリング対象は、20代前半カップル2組、40代後半夫婦1組、40代前半主婦1組、30代前半家族連れ4組、60代夫婦2組

ヒアリングにご協力して下さった皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。

日間賀島観光ホテル社長へのインタビュー

ヒアリング調査を終えた私たちは、清水さんに車で日間賀観光ホテルまで乗せてもらい、代表取締役社長の中山幸彦さんに日間賀島と観光についてのお話を伺った。お話を伺った場所はホテルの一室で、見晴らしが良く三河湾を一望でき、とても気持ち良かった。中山さんは日間賀観光のコンセプトはやはりタコとフグで、単純にタコとフグによって観光客が増え利益が出ているという。そして日間賀島には京都などの料亭で経験を積んだ腕の良い板前がいるため、良い食材を質の高い技術で提供できるのが強みだと答えてくださった。

そのため、ブランドイメージも観光客に浸透し、島で提供する食品はしっかりと元が取れる値段だが、観光客のイメージは食材の値段を上回っているため、高級な食材をリーズナブルな価格で提供してもらったと思い、満足するという仕組みが成立するという。先の定食屋が良い例だ。

冬と夏では観光目的と観光客数、年齢層はどう変化するのかという質問に対しては、冬は99%が食を求めての訪問で、島側も観光客にゆっくりしてもらおうのが狙いだという。さらに冬は宴会をする客も多く、そのほとんどが宿泊をする。そのため、ホテルや民宿、旅館などの宿泊施設も冬の客数が多いという。年齢層も冬のほうが高い傾向にあるが、近年は若者も冬に来るようになった。その理由は SNS などの普及により気軽に日間賀島の情報を得ることが可能になり、日間賀島の存在が“ポップ”になったからだという。

夏は若い観光客が多く、海水浴、釣り、サイクリング、イルカが観光の目玉だ。イルカ事業が日間賀島で定着したことによって観光客の数が急増し、観光商店や土産店などの売り上げは大幅に伸びたという。ただし、そのほとんどは日帰りなので、旅館などの宿泊施設の客足は劇的には伸びないそうだ。イルカ事業によって日間賀の知名度がアップし、観光客も増加するなど島に与えた功績は大きいですが、それを支えている漁師の功績も大きい。一緒にお話を伺っていた清水さんは、漁師とイルカありきの日間賀島だと言う。

日間賀島観光がメジャーになったもう一つの理由として名鉄の存在が大きい。名鉄が設立された当初から日間賀島との関係は続いていて、意外にも名鉄側から関係を持ち込んでおり、日間賀観光によって利益が出ているという。そして日間賀島も名鉄のおかげで観光

客を維持できているのだ。名鉄と日間賀島は切っても切れない関係であり、お互いになく
てはならない存在だ。中山さんは、“名鉄があって島、島があって名鉄”と語る。



島の活性化の課題

私は名鉄と日間賀島のようにお互いに依存しあう関係を築くことが島の活性化において重要ではないかと考える。どちらか一方だけが利益を求めようでは活性化に繋がらない。つまり、経済活動の循環が生まれないと思う。先のイルカ事業も、イルカ側と島側の双方にプラスの関係であるため、付加価値の高い観光資源としての役割を担っている。島を活性化させるには外部の力が大きいことは確かだが、島の漁師や観光業者などがその必要性を強く認識し、しっかりと外部へ働き掛けていく島側の主体性こそが最も重要であるといえそうだ。

島を活性化させるうえで最も重要なカギを握るのが、固定客(ファン、リピーター)を増加させることだ。渡船料金が日本一高くても利益が出るのは、このファンのおかげだという。旅館などの宿泊施設もほとんどが固定客のおかげで成り立っている。では日間賀島ではどのようにして固定客を増やしているのか。それは、四季を通して島の特色を出し、観光客を飽きさせないことだそう。冬の観光客を増やそうと思ったら、冬に良いサービスを集中させるのではなく、冬以外の季節もサービスを充実させることで冬の観光客の増加につながるという。それは夏の場合も同じだ。日間賀島では春から夏にかけてはタコ、海水浴、5月から9月中旬までイルカ、そして冬にはフグ、そして年中楽しめるものではサイクリングや釣りがある。1年を通して観光を楽しめる環境を整えてきたのである。このような誘客装置を考案し、実践してきたことによって日間賀島は固定客を生み出している。

日間賀島の未来

今後の日間賀島の展望については、釣り船体験や、日間賀島の漁師がインストラクターとなったスキューバー体験に挑戦したいという。また、大学生に手伝ってもらいアートで島おこしなんてのもいいね、という。瀬戸内海の香川県直島の芸術の島おこしが参考にな

るかもしれない。日間賀島の将来を語る中山さんと清水さんの目は少年のように輝いていた。

2時間にわたる話し合いを終えた私たちは、西港からサンライズビーチに向かって1時間程度ゴミ拾いをするようになった。そして歩き始めて早々私たちは散乱するゴミの多さに驚いた。少し歩いていくだけでどんどんゴミ袋にゴミが溜まっていくのだ。特に缶の多さは予想を超えていた。日間賀島では定期的(週2~3回)にゴミ拾いをしているそうだが、呼びかけは行っていないという。観光客が落としていくゴミの量に日間賀島のゴミ対策が追い付いていない印象をもった。

歩いていく過程で私たちは一つの問題点を見つけた。それは目立つ場所にゴミ箱があまり設置されていないということだ。おそらく観光客は散策している途中でゴミ箱が少ないためポイ捨てをしてしまうのだろう。観光客が増えることは良いことだが、それによって景観が失われ、観光客が遠のくという事態も招きかねない。対策としてゴミ拾いのペースを増やすことも大切だが、それ以上に観光マップにゴミ箱の位置を示したり、ポイ捨て禁止の美観保全条例を島民と行政が一緒になって作り、潮騒と美食、健康と美観の島おこしなど目標を明確にした取り組みが急がれると感じた。

結局、私たちは一時間弱で45リットル袋5袋分のゴミを回収した。そのうち2袋は缶だった。

ゴミ拾いを終えた私たちは、海上タクシーに乗り込み師崎漁港へと向かった。そして清水さんに名鉄河和駅まで乗せてもらい、お礼の言葉を述べて今回の活動を終了した。今回の日間賀島訪問で分かったことは、日間賀島は住民と観光事業者、そして漁師と行政が一体となって島経済を活性化させたいという強い気持ちを抱いていることである。その気持ちを実践し、循環型の島経済社会がつけられているのである。

その際、外部の資本もうまく活用し、より大きな経済循環構造を形成することが島の活性化に繋がっているということを知ることができた。とびぬけた大企業がなくても、地元の住民や産業界が行政と協力し合い、自然や文化を大切にしながら情報ネットワークや鉄道といったインフラをも活用していけば、地元主導の地域づくりが可能であることを学ぶことができたと思う。



